辛くないししとう

ししわかまる

ししとうは、栽培条件によって辛い果実が発生することがあり、外観からは区別ができないため、消費者から敬遠される要因となっていました。

そこで、暖地園芸センターでは、京都教育大学と連携し、在来品種「紀州ししとう1号」とピーマンとの掛け合わせなどを繰り返して、7年の歳月をかけ、辛み成分が発生しない「ししわかまる」を育成しました。

現在、県内の各産地で試験栽培を開始しており、市場では高値で取引された実績もあり、産地の収益向上が期待されています。また、辛みが苦手な方でも安心して食べられるという利点を活かし、販路として業務用にも提案できる強みがあります。

出荷前にJAの組合員らが検品をする様子

病気に強く、極早生で良食味

紀の香（きか）

農業試験場で育成されたいちご「まりひめ」は、大粒で、甘みが強く、ほどよい酸味が特徴で、現在、県内のいちごの主力品種となっています。しかし、株が枯死する炭そ病に弱く、安定生産には熟練の栽培技術が求められるため、同試験場では、「まりひめ」と同程度の糖度で炭そ病に強い、極早生の「紀の香」を育成しました。

11月中旬から収穫できる「紀の香」の登場で、「まりひめ」とともに県産ブランドいちごによる産地の活性化が期待されています。

「紀の香」は、平成30年に品種登録され、農家での栽培も始まっています。現在、その品種特性を活かした栽培技術の開発を進めています。

低温管理でも生育が良く、多収量

紀州ファインライラック（きしゅう）、紀州ファインオーシャン

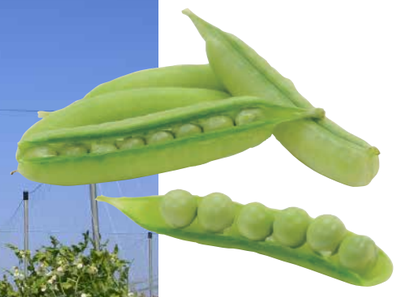
スターチスは、本県が出荷量、栽培面積ともに全国1位の品目です（令和2年産花き生産出荷統計）。

暖地園芸センターでは、これまで「紀州ファインシリーズ」として10品種を育成しており、この度、青色品種の「紀州ファインライラック」と「紀州ファインオーシャン」の2品種を新たに育成しました。

この品種は、ハウス内の夜温管理を通常より低温の2℃または無加温にしても、1株あたりの切り花本数が既存の県オリジナル品種より多く、燃油コスト削減も期待できるという優位性をもっており、産地への普及に取り組んでいきます。

草丈が低く収穫しやすい

光丸（みつまる）うすい



本県のえんどうは、出荷量で全国第2位（令和2年産野菜生産出荷統計）を誇っており、暖地園芸センターでは、うすいえんどうの「きしゅううすい」や、きぬさやえんどうの「紀州さや美人」などの県オリジナル品種を育成してきました。しかし、主力品種である「きしゅううすい」は、ハウス栽培では草丈が伸び、収穫や整枝などの作業性に課題があったことから、草丈が低い短節間品種の育成が求められてきました。

そうした中、みなべ町内で節間の短い系統が発見され、さやの形質が主要品種と同等で、草丈が低く、収穫時の作業効率が良い有望種であったため、産地関係者の協力のもと特性調査を実施するなど、品種登録支援を行いました。

この「光丸うすい」は、省力化が図られる優良品種として、栽培技術の確立などが進められています。